

エデュコ  
Edulico

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.68  
2025年

井端 弘和さん

巻頭インタビュー p.2  
野球日本代表 侍ジャパントップチーム監督



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 部活動改革を踏まえた  
生徒たちの放課後の活動の充実
- ② 中学生の持続可能な放課後活動を目ざして

きょういく見聞録 p.8

- ① ヒロシマで見て、聞いて、感じて、考えて、  
深める平和学習を
- ② STATION Aiがつくる、  
学びと社会の新たな接点

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

【連載第3回】

子どもの心理とコロナ禍  
～“何ものか”と“道徳的傷つき”～

Front Runner p.15

【連載第1回】

現代アートのすゝめ

ほっとな出会い p.16

指揮者 吉田 裕史さん

# 子どもたちの“努力の素質”を育て、人としての土台を創る

野球日本代表 侍ジャパントップチーム監督

井端 弘和さん

## 野球人生の始まり

「自分が好きで始めたことなんだから、簡単に辞めてはいけないよ」小学1年生で地元の軟式少年野球団に入ったのですが、両親とチームの監督からまったく同じことを言われました。子ども心にその言葉が心に焼きついたのです。うね。練習がキツいとかそんなことぐらいいでは「辞めたい」とは思わなかったし、そんな選択肢がそもそも頭に浮かびませんでした。これまで野球を続けてこられたのは、野球が好きなのはもちろんですが、自分の根っこにあの言葉があつたからだと思います。

## 運命を変えた

### 故・野村克也監督からの一言

毎日のように白球を追う子ども時代を過ごし、運動神経もそこそこよかったので、6年生に上がる頃にはエースで4番を打つようになっていました。しかし、シニアになると僕よりうまい人などゴロゴロ出てくる。特に同じ地区にはあの野村克也監督が率いる「港東ムース」という強豪がいて、僕らのチームはいつもコテンパンに負けていました。レベルが違いすぎてたつた1点すら取れない。せめて一矢報いたいと思い、その翌年は粘ってなんとか1点返して「1点取れたぞ。やった!」と喜んでいて、そんなやりさまでした。しかしある時、野村監督が「うちに練習しに来ないか?」と声を

かけてくれたのです。他にもすごい選手はいっぱいたので「なぜ僕?」と思いました。が、「港東ムース」に負けて全国大会行きを逃しているわけですから、こう暇で、ありがたく何度か練習に参加させていただきました。

ほどなくして野村さんはヤクルトスワローズの監督に就任され、お会いする機会はほぼなくなったものの、その後も折につけ気にかけてくださいました。進路について悩んでいた中学3年生の頃も電話で相談に乗ってくれまして、その話の終わりに何の前ぶれもなく「高校ではピッチャーはやるな、ショート一本でいけ」と。

「あの野村さんがここまで断言してくれたのだから」と、進学した堀越高校ではショートにコンバートしました。野村さんとの出会いがなければ、ショート井端は誕生していなかったかもしれない。野村さんが僕の内野プレーを見る機会はほとんどなかったはずですが、体格や足の速さ、粘ろうとする姿勢など、わずかな時間で僕のよいところを



## PROFILE

侍ジャパントップチーム監督。侍ジャパンU-15代表監督も兼任。2022年から2年間は、侍ジャパンU-12の監督も務めている。堀越高等学校から亜細亜大学を経て1997年に中日ドラゴンズに入団。荒木雅博内野手との鉄壁の二遊間コンビは「アライバコンビ」の愛称でファンに親しまれた。2013年には第3回WBC日本代表に選出。WBC東京ラウンドでMVP、大会ベストナインを受賞。2014年、読売ジャイアンツに移籍し翌年に現役を引退。ベストナイン5回、ゴールデングラブ賞7回受賞。近年は少年野球にも指導の幅を広げ、野球の普及振興に力を注ぐ。

見つけ、言葉をかけてくれたのではないのでしょうか? 今となつては野村さんの真意はわかりませんが、侍ジャパンU-12、U-15、また、主宰する野球塾で未来ある子どもたちを指導する立場を経験してからは、野村さんのように子どもたち一人一人を「ちゃんと見る」との大切さを身に染みて感じています。

## 社会人野球から少年野球まで

### 幅広く指導する理由

プロおよび社会人野球から少年野球の指導へとフィールドを広げたのは、幅広い世代の野球シーンを知ったからです。2015年に現役を引退し、巨人軍の内野守備・走塁コーチをしていた頃、変なクセがついていてうまく体を使えていない選手がいるのを見て「あれ?」と思ったのが始まりでした。しか



も一度変なクセがついてしまうと直すのがすごく難しく、少し目を離すとすぐ元の状態に戻ってしまう。その後、2020年に臨時コーチとして就任したNTT東日本硬式野球部でも同じ現象に突き当たり、「一体、いつ、どこでこうなってしまったのだろうか?」と疑問を抱いたのです。そこで、野球を始めだす頃、つまり小学生時代まで戻ってみよう。

少年野球の現場で子どもたちを見てみると、プレー中に迫力のようなものを醸す子がいることに気づきました。「この子は伸びるだろうな」と直感する一方で「体ができあがっているわけでもなく、パワーもないのになぜ?」と不思議でもありました。が、よくよく観察してみると、そういう子はきまつて体の使い方の基本が身につけている。特に無意識下でのとっさの動きにそれがよく出ていて、こちらがハツとするような迫力あるプレーにつながっていたのです。逆に、基本ができておらず

力に頼っていると、ポテンシャルのわりには上達スピードが遅いし、故障もしやすくなってしまいます。初期の段階での基礎、やはり土台が重要なのだと改めて実感しました。

### 偶然のホームランより

### 10を20にする努力が大切

子どもたちを見てみると「この一週間サボっていたな」とか「練習してきたな」というのが一目瞭然です。僕はどんな小さなことでも努力の跡が見えたときには「ちゃんとやってきたね」「ここができているよ」と声がけするようにして、サボっていたけど、たまたまよい当たりが出たときなどはさほど評価をしません。どんなに才能がある選手でもずっと順風満帆なんてことはありえない。伸び悩んだり不調が続いたり、うまくいかない時期が必ず訪れるんです。しかし、翌日にすべき練習をイメージしながら、小さな努力を継続できる子はそんな苦しい時期を乗り越えてゆけます。ホームランを打ったとかレギュラーになったとか、つい結果のほうに目がいきがちなのですが、プロを目指す子どもばかりではありませんし、10を20に、20を30にするための努力を続けてゆける、そんな人間としての土台も育ててあげたいと思います。

僕は野球ですが、学校の先生がたは子どもたちの勉強の努力の跡がわか

るのだろうと思います。テストの点数だけではなく、その努力に目を向けてあげてほしいですね。

### 子ども時代は

### 得意なことを見つける時期

勉強でいうと、僕は全教科がまんべんなくできる必要はなく、苦手な科目があつていいと思っています。不得意を得意に変えてあげることも大事かもしれませんが、子ども時代は自分が得意なことや、好きなことを見つける時期ではないでしょうか? プロ野球で活躍している選手の中にも圧倒的な打撃力をもつ反面、守備はからつきしというような両極端なタイプがいます。打てるものだから守備に重きをおかずともプロになれたのでしょうか、勝負時でエラーをしたり、ファンにがつかりされたりしながら、一つのエラーが恥ずかしくなつて「うまくならない」と思う瞬間が訪れるのです。そんな選手が遅まきながらも守備の練習に取り組み、苦手な守備が普通のレベルになったら非常に手ごわい選手に化けてゆく。苦手なことは子どもたちが自ら克服したくなつた時、例えば「社会と国語は得意だけど、算数もがんばりたいな」と思つた時に取り組めばいい。自分から「苦手を克服したい」と思うのと、人から指摘されて取り組むのでは習得するスピードがまるで違いますから、あまり欠点に目を向けすぎず、まずは子

どもたちの個性や得意なことを伸ばすほうを優先させてもよいのではないのでしょうか。これからの時代は、自分が好きなことや強みを知っているほうが生きやすいし、そのほうがスケールの大きな人間に育つてゆけるのではないかと思います。

### 次なる目標へ向けて

侍ジャバントップチーム監督として、2026年3月に開幕するWBCで結果を残すことはもちろん最優先事項ですが、50代のうちの目標の一つに高校野球の監督に挑戦したいという気持ちがあります。高校時代はたったの3年間。その中で野球に取り組める時間は2年3か月間ほど。彼らの青春はとても短いのです。だからこそ無駄なことは極力省き、選手たちが効率よく上達し、成長を日々実感できるように練習をさせてあげたい。

そのために、指導者として学ぶべきことはまだまだあります。教えるということに関しては終わりというものがないのかもしれませんが、子どもたちの人としての土台を創る仕事、を担われている、小・中学校の先生がたは本当に大変だとは思いますが、できる限り子どもたち一人一人を見て、声をかけてあげてほしいですね。先生がたにかけていただいた一言をいつまでも忘れない、そんな子どもはたくさんいると思います。



## 部活動の地域展開

# 部活動改革を踏まえた 生徒たちの放課後の 活動の充実

### ポイント

- ① 生徒たちの活動の充実、教員の働き方改革の一環として、部活動の地域展開が始まっている
- ② 各学校で部活動改革が行われているが、学校の所在地、自治体の財政力等によって温度差がみられる
- ③ 放課後の活動を部活動に限定せず、生徒のさまざまな活動の場として提供する発想の転換が必要である

### はじめに

私は中学校に入学した当時、部活動で毎日、大好きな野球ができることがとにかくうれしかった。しかし2年生になり、長期休業日も含めて平日も休日もほぼ毎日、野球漬けという生活に疑問を感じるようになり、徐々に部活動への情熱が薄れていった。

また、中学校の教員になって、全く専門外の男子サッカー部、女子バスケットボール部、女子バレーボール部、硬式テニス部の顧問を担当した。経験のある野球部の顧問は教員生活15年間で2年だけであり、部活動指導は正直苦痛だった。

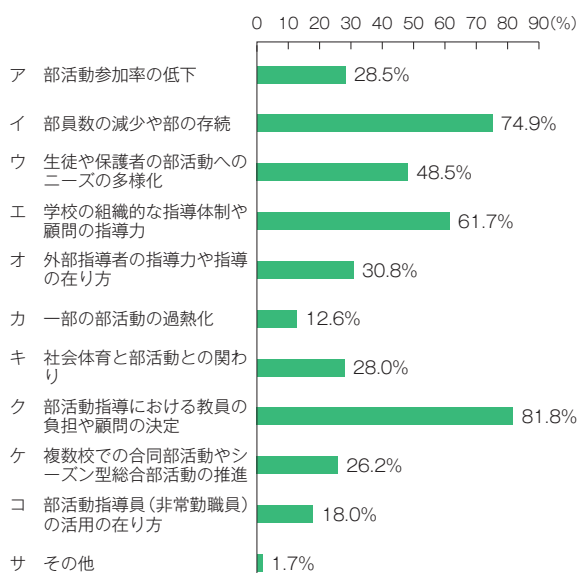
### 始まった部活動改革

全日本中学校長会は令和5年度に

### 調査3 部活動の在り方の検討に関する調査

#### 1 現状について

(1) 貴校の、最近5年間(程度)の部活動の課題をお答えください。【複数回答可】



※外部指導者…顧問の教諭と連携・協力しながら部活動のコーチ等として技術的な指導を行う。

※部活動指導員…部活動の技術指導や大会への引率等を行うことを職務とする。(学校教育法施行規則に平成29年4月1日より規定)

【考察】最も多いのは「部活動指導における教員の負担や顧問の決定」(81.8%)であり、昨年度と同様である。「部活動参加率の低下」(28.5%)が5.4ポイント増加、「生徒や保護者の部活動へのニーズの多様化」(48.5%)が5.5ポイント増加している。

● 令和5年度全日本中学校長会「調査研究報告書」より抜粋

「最近5年間(程度)の部活動の課題」についてアンケート調査を行い、47都道府県の公立中学校の学校規模別に選んだ481校から回答を得た。その結果(左図)から、生徒について

このような実態も踏まえ、数年前から部活動改革が始まっている。文部科学省はこの間、部活動指導員の名称や職務の明確化、ガイドラインの策定、休日の部活動の地域展開、教員の働き方改革を踏まえた負担軽減、地域クラブ活動の整備、大会等の在り



元国立音楽大学教授

榎本智司

### 文部科学省の示す方向性

では部員数の減少やそれに伴う部の存続の問題、部活動に対するニーズの多様化、部活動参加率の低下。教員については、顧問のなり手不足や、顧問になる負担感などの問題があることがわかる。特に「教員の負担や顧問の決定」については、8割以上の学校が課題と指摘している。

方の見直しなどの改善策を示してきた。令和7年5月には、『地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議』最終とりまとめ「子供たちの豊かで幅広いスポーツ・文化芸術活動の保障に向けて」が発出され、改めて学校単位で部活動として行われてきた、スポーツや文化芸術活動を地域全体で連携（地域展開）して支え、生徒の豊かで幅広い活動の機会を保障していく方向性が示された。

## 東京都内の中学校の事例

このような国の動きを受けて、自治体や学校では独自のさまざまな取組が行われている。

### (1) 区部のA中学校の実践

地域クラブ活動と従来の学校部活動を併用している。地域クラブ活動としては、区教育委員会が企業と提携し、学校の求めに応じて、試合や大会等の引率も可能な「部活動指導員」が配置され指導にあたっている。他に技術指導等だけができる「外部指導者」は学校判断で採用が可能である。現在「部活動指導員」が五つの部活動（運動部4、文化部1）に、「外部指導者」が三つの部活動（運動部1、文化部2）に導入されている。

専門的な技術指導等が可能になったが、全ての部活動に「部活動指導員」

が配置されているわけではない。指導員の技術的な指導力や指導方法、生徒とのトラブル等の課題もある。教員にとつては、活動時間中に他の業務を行えるという利点があるが、さまざまな課題の対応には学校が関わらざるを得ない状況があり、完全に外部の指導員に指導を任せることはできていない。

中には、積極的に部活動指導を行いたい教員もあり、地域クラブ活動と調整が必要なケースもある。また、また専門的な技術をもたない教員が顧問にならざるを得ないケースもある。生徒たちにとつて地域クラブ活動への移行は、専門的な指導が受けられることから、おおむね好評である。

### (2) 市部のB中学校の実践

活動日は火、木、金曜日および休日の週3日以内で、活動時間は平日で1時間30分以内、休日は最長3時間としている。始業時刻を10分早めたり、清掃を週2回にしたりして活動時間を確保し、平日の生徒の最終下校時刻を17時15分としている。

土、日曜日の試合や大会等に引率も可能な「部活動指導員」を市として60名採用しており、B校には六つの部活動（運動部5、文化部1）に配置されている。また、引率は行えず、技術指導のみを担当できる「クラブ指導助手」が平日だけ指導にあたっている部

もある。

会議や研修会等で、教員が不在になる時間帯には、保護者が部活動の見守りを行い、活動時間の確保に協力している。さらに、市の地域学校支援事業で地域部活動として三つの部活動が運営されている。

特筆すべき取組として、年度ごとの申請により都大会等への出場を目指す「強化部」を指定し、「強化部」に関しては週4日の活動を認め、休日の指導は「部活動指導員」が最長3時間まで行えるようにしている。

このような取組を通して、平日2日は部活動をなくしたため、生徒にとつては時間的にも精神的にも余裕ができて、不登校や遅刻者が減った。教員にとつては教科指導の時間や補習、面談等の時間の確保が可能になり、退勤時間も早くなり、体調不良者も減った。

## 部活動を含めた放課後の活動の方向性

各学校では自治体の支援の下で地域や企業等と連携し、生徒や地域の実態等に応じて、工夫しながらの部活動改革が始まっている。

これまで、生徒にとつて放課後は部活動か帰宅かの選択肢しかなかった。今後は部活動を存続させながら、学級活動や学校行事の充実、生徒同士や生

徒と教員との語り、学力補充、学校図書館の積極的な開放、校庭や体育館等でのレクリエーション、同じ趣味をもつ者たちの活動の場などとして学校を提供する大胆な発想の転換も必要でないかと考える。

いずれにしても、今後の放課後の活動について、教員、生徒、保護者、地域、自治体が一堂に会し、検討を進めることが大切である。

ただ、指導者の確保や生徒指導も含めた指導力、服務等の問題、自治体の財政力など地域差がみられる。自治体の独自性も大切にしつつ、このような問題の解消が全国全ての生徒たちの活動の充実のためには必要となる。

## おわりに

冒頭で紹介した私自身が体験したような状況は、生徒側、教員側ともに改善されつつある。生徒や教員にとつて最優先なのは日々の授業である。部活動をはじめとした放課後の活動は、生徒たちにとつて学校生活に“彩り”を与えるものであり、やりたい活動を、やりたい時に、活動したい仲間たちと一緒に無理のない範囲で行えるようにするのが理想である。教員の働き方改革にも配慮しながら、生徒たちの放課後の活動をいかに充実させていくかが今後の課題である。



## 部活動の地域展開

# 中学生の持続可能な放課後活動を目ざして

### ポイント

- ① 中学校部活動の地域展開に向けて、論点整理とモデル事業の実施を同時に行った
- ② 既存の部活動にある種目を実施するため、学校と連携し野球部を地域クラブへ移行
- ③ 今後は行政が運営する地域クラブへ中学校部活動を移行しながら、将来的には地域展開を見据えて検討を進めていく

### 板橋区における部活動改革の取組について

部活動改革を実施する背景としては「少子化の影響」「教員にとつて過大な負担」の2点が主にあげられるが、板橋区においても学校によっては小規模化し、団体競技などでチーム編成がでずに試合に参加できない、生徒がやりたい種目・分野の部活動が設置されていないといった部活動の停滞が起きている学校が散見された。

そうした中学校部活動が持続可能性の面で厳しさを増していく中、板橋区においても学校部活動を持続可能な形へするための検討を始め、令和6年3月に「板橋区立中学校部活動地域移行推進ビジョン2030・板橋区立中学校部活動地域移行実施計画

東京都板橋区教育委員会事務局  
教育総務課

2025」を策定した。

このビジョンでは「行政による地域クラブ（いたばし地域クラブ）の推進」「地域連携の活用」「地域展開の環境整備」の三つの重点戦略を掲げている。

国の提言やガイドラインでは、地域移行（地域展開）の主な担い手として民間の地域クラブ等を想定している。板橋区も民間の地域クラブに中学生が参加することで、生涯スポーツ社会、生涯学習社会の進展に大きく寄与する



ものとして期待している。一方、区立中学校22校には約9千300名の生徒がおり、区内もしくは近隣区を含めた民間の地域クラブがすぐにこの人数の中学生を受け入れることが現実的ではないと考え、ビジョンでも重点戦略の一つに掲げている「行政による地域クラブ（いたばし地域クラブ）の推進」に取り組んでいる。

「いたばし地域クラブ」は、令和5年5月から実践研究モデル事業として立ち上げた区教育委員会を運営団体とする地域クラブである。中学生の受け皿となる地域クラブであると同時に、教育委員会事務局として地域クラブ活動を実施するにあたっての課題やノウハウを収集するために立ち上げた。当初の種目・分野の選定としては女子サッカークラブやeスポーツクラブなど、区立中学校部活動にはない種目・分野をまず実施することで、学校現場への影響がないようスタートした。一方で、学校現場への影響がないという形での実施は、教員の負担軽減に直接寄与するわけではないため、次の段階として学校部活動にある種目を「いたばし地域クラブ」へ移行していく検討を進めていった。

次に、二つめの重点戦略として、「地域連携の活用」を掲げ、学校部活動の支援を行っている。会計年度任用職員

である部活動指導員や有償ボランティアである部活動指導補助員（外部指導者）を配置することで、教員の負担軽減を図り、生徒にとっても専門的な指導を受けられるといった効果をもたらしている。板橋区では令和6年度より部活動指導員を3名から44名に増員している。

さらに、三つめの重点戦略として、「地域展開の環境整備」を掲げている。既に地域で活動しているスポーツ団体や、文化芸術団体などの民間地域クラブに中学生を受け入れてもらえるよう、取組を検討している。令和6年度は受け皿になり得る団体や個人、また保護者や地域のかたを含め部活動地域移行についての共通理解を深める場として「部活動地域移行シンポジウム」を開催し、区の取組を説明するだけでなく、課題について議論し、部活動改革を推進してきた。

## 「いたばし地域クラブ」の活動状況

現在「いたばし地域クラブ」では、女子サッカー、eスポーツ、ロボット数学、サイエンス、そして令和7年度より軟式野球が加わり、5種目のクラブを創設した。

令和5年度から実施している女子サッカーは週一回の活動ではあるが、

ユニフォームを作成し、日本サッカー協会の主催する女子中学生のチームを対象とした交流大会にも参加できた。その他にも、WEリーグ（女子サッカーのプロリーグ）の公式戦を観戦したり、公式戦のボールパーソンを担ったりと、貴重な経験もでき、普段の練習からも楽しく活動している生徒の姿を見ることができている。

参加してくれている生徒からは、「中学校でサッカーをやりたいかったけど、男子に混ざってやるのは難しく、サッカーをやる場がなかったので参加したいと思った」「弟がサッカーをやっている、自分もやってみたいと思っていたところ、女子サッカークラブができると聞いたので是非参加してみたいと思った」といった声を聞いた。

その他のクラブにも共通する部分ではあるが、中学生の新たな活動の場を生み出したものと認識している。

## 野球クラブの実施と今後の方向性

令和7年度からは、板橋区における部活動改革の次の段階として、学校部活動にある種目・分野を「いたばし地域クラブ」へ移行することに挑戦している。22校中19校にあった野球部を前身とし、9名未満の野球部については調整・合併のうえ一つのチームと



●女子サッカークラブ

し、17チームでスタートした。地域クラブ化することで、在籍校に野球部がなかった学校の生徒が近隣校を会場としているクラブに参加できるようになり、在籍校の部活動設置の有無によって野球を選択できなかった生徒の選択肢を広げることができた。

また、公式戦ではトーナメント方式の大会が多いことから、選手の出場機会を確保することや指導者の指導力向上を図るため、板橋区における独自の



●野球クラブ

リーグ戦の開催も検討している。野球部を地域クラブ化する際には、区立全中学校で同時に行うことで、活動場所の確保や制度が混在することによる混乱を一定防ぐことができた。

今後は、種目ごとに学校部活動を「いたばし地域クラブ」へ移行しつつも、将来的には民間の地域クラブに中学生を受け入れてもらえるよう、地域展開の環境整備を進めることで、中学生の成長機会の確保に努めていく。



# ヒロシマで見て、聞いて、感じて、考えて、 深める平和学習を 平和を愛する諸都市・市民とともに進める平和学習



■ 原爆死没者慰霊碑

公益財団法人広島平和文化センター  
平和文化振興部平和学習課

課長補佐 日浦 聡一

広島平和文化センターでは被爆後80年を契機として、若い世代への平和学習を推進するため、令和7年4月に平和学習課を新設しました。当課では一人でも多くの子どもたちが被爆地・広島を訪れ、原爆による被害やその後の復興について知り、それに関わる人々の平和への思いを感じ、自己の生き方にもつながる深い学びができるよう取組を進めています。

## より重要度を増す 平和学習

戦争体験者や被爆者のかたがたが非常に高齢となつている中、市民社会が平和の希求という理想をもち続け、平和文化を振興していくにあたっては、その基盤として若い世代の平和意識を高めることが喫緊の課題となつていま



■ 原爆の子の像

す。そのような状況下において、今年の1月17日に開催された平和首長会議国内加盟都市会議では、各都市が次世代の平和文化の担い手を育成していくため、戦争の悲惨さに関する学びや、各地の戦跡・被爆地への派遣など、若い世代が戦争や原爆被害を実感し、平和を尊重する意識を高めることにつながる平和学習の取組を推進することが重要であるとして「戦後80周年を契機とした若い世代への平和学習の展開について（申合せ）」が全会一致により採択されました。

## ヒロシマにふれ、 自分ごととして 平和について考える

修学旅行で広島を訪れた学校からいただいた声を紹介します。

・ 日本中の子どもたちに、10代が終わるまでに一度は被爆地を訪れ、心を



全国の子どもたちが被爆地・広島を  
実際に訪問して被爆の実相にふれるこ  
とで、戦争や原爆を自分ごととしてリ  
アルに実感し、核兵器廃絶や世界の恒  
久平和に関心をもつとともに、社会を  
担う一員として戦争・被爆体験を語り

震わせる機会を作っておあげて欲しい  
・知識として頭にとどめさせるだけで  
なく、感情・思考として心にとどめ  
させる一助になっている  
・平和を大切にする活動をしている人  
たちがいることに気づき、その思い  
も受けとめることができた  
・多くの外国からの観光客が熱心に展  
示内容を見ている姿は関心の高さを  
示しており、子どもたちに世界的な  
視野を与える一助になっている  
・資料館や平和記念公園周辺をフイー  
ルドワークすることで、平和のあり  
がたさを感じることができた  
・事前学習で学んだ知識をもとにしつ  
つ、実際に被害にあった広島を地を  
訪れ、自分の目と耳で生の情報にふ  
れることで、平和に対する思いや願  
い、自分たちの使命についての思い  
が強くなった。また、平和について  
「自分ごと」としてとらえる意識が  
より一層高まった  
・「わが子は広島に寄った夜、怖くて  
眠れなかったみたいです。それくら  
いの経験、学習をさせてもらい、本  
当にありがとうございました」と保  
護者からお礼の電話をいただいた



■モニター校で実施した平和学習講座



■全国平和学習の集いのグループ討議（令和6年）

継いでいく責任を認識し、声を上げる  
ことにつながっていくと考えます。

## 若い世代への取組

平和学習課でスタートした主な取組  
を紹介します。

### (1) ヒロシマ平和学習受入プログラム

8月6日の平和記念式典に全国の自  
治体から派遣される青少年に平和学習  
に資するプログラムを提供し、また派  
遣に係る経費に対し国の財政支援を得  
てその3分の1を補助します。

① 全国平和学習の集い  
（8月5日、6日、7日）

全国の自治体から派遣される青少年  
と広島府の青少年が被爆体験講話を聞い  
たり、グループ討議を行ったりして交

流します。

② 全国こども平和サミット  
（8月6日）

全国から参加する子どもたちが、自  
らの平和への取組について発表し、被  
爆体験講話の聴講や原爆詩の朗読等の  
共通体験を行います。

### (2) 平和学習を考える教師の集い

関東の公立中学校の教員を広島に招  
き、広島への修学旅行の実施を目標に  
据えて、包括的な平和学習の事例発表  
と討議を行い、広島でのさまざまな平  
和学習プログラムを実際に体験してい  
ただけます。

### (3) 平和学習モニター校指定制度

関東で原則初めて広島への修学旅行  
を行う公立中学校をモニター校として  
指定し、広島滞在中や事前事後の平和

## 広島市外への派遣に係る費用

|        |                                                                                     |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| ①<br>③ | 講師の交通費、宿泊費および<br>謝礼金は無料<br>（国立広島原爆死没者追悼平<br>和祈念館が負担）<br>ただし、①の派遣可能期間は<br>12月～翌年3月のみ |
| ④      | 謝礼金 4,100 円および<br>交通費実費                                                             |

※詳しくは下記 HP をご覧ください。



広島平和記念  
資料館



国立広島原爆死没者  
追悼平和祈念館

- ① 被爆体験講話（被爆者ご本人が被爆体  
験を証言）
- ② 被爆体験伝承講話（被爆者から被爆体  
験を受け継いだ「被爆体験伝承者」お  
よび「家族伝承者」による講話）
- ③ 被爆体験朗読会（ボランティアが被  
爆者の体験記や詩を朗読）
- ④ 平和学習講座（講師がパワーポイント  
資料で被爆の実相や核兵器をめぐる世  
界情勢を解説）
- ⑤ 原爆展・平和学習用資料の貸出（アニ  
メーション映像のDVD、被爆体験証  
言者と高校生との共同制作による原爆の  
絵等※送料は申込者の負担）

## 全国で活用できる 広島の平和学習プログラムの例

学習の支援、助成金の支給等により、  
修学旅行先の広島への変更を支援する  
とともに、広島府の平和学習プログラム  
の更なる充実を図ります。モニター校  
には包括的な平和学習と広島修学旅行  
の効果を地域で広く発信・共有してい  
ただけます。

# STATION Ai がつくる、 学びと社会の新たな接点



STATION Ai 株式会社  
代表取締役社長兼 CEO

佐橋 宏隆

近年、教育の現場で「アントレプレナーシップ（起業家）教育」という言葉が多く聞かれるようになりました。狭義でいえば「起業家を輩出・育成するための教育」といった意味です。多くのの人にとって、起業をすることやスタートアップ企業で働くことは、遠い誰かがやっていること、自分とは関係ないこと、と思われるかもしれません。しかし、いまアントレプレナーシップ教育は確かに芽生え、多くの学校に「起業部」が立ち上がり、その学生たちが STATION Ai に足を運んでいます。

なぜ、今アントレプレナーシップ教育なのか？

2022年に政府が打ち出した「スタートアップ育成5か年計画」を皮切りに、スタートアップ業界に大きな変化が生まれました。その変化の一つがアントレプレナーシップ教育の推進

を文科省が掲げたことでした。アントレプレナーシップ教育は、単に起業家を育てるための教育ではなく、起業家がつまみインドを学び、起業を含めたさまざまな課題に対処する力を養うことを目指しています。特に、昨今のテクノロジーの発展や世界情勢の複雑かつ変化の激しい現代社会において、自ら課題を発見し、主体的に解決に取り組む力が重要視されています。この過程において、他者との関わり方や協働で一つの課題に向き合っていく能力を学んでいくことができます。

日本最大級のオープンイノベーション拠点  
「STATION Ai」とは

私たち STATION Ai 株式会社（愛知県名古屋市中区）は、2022年に Pre-STATION Ai、2024年10月に STATION Ai を開業しました。スタートアップ企業向けのオフィスや会議室、最新のテックラボ、イベントスペース、飲食施設やホテル、託児所、フィットネスなどを備えた地上7階建て、延床面積2万3千600平方メートルの日本最大規模のオープンイノベーション拠点です。起業家や企業勤務の新規事業担当者、研究者、学生、地域住民までもが交差する「共創の拠点」としての





■ 3階のコワーキングスペース

機能をもっています。STATION Aiには、約500社のスタートアップと、200社を超える大企業や大学、自治体、VC（ベンチャーキャピタル）、スタートアップ企業に投資を行う投資会社やファンド）などが参画しています。入居企業はAI、ヘルスケア、教育、製造、スマートビル、GX（グリーン・トランスフォーメーション…化石燃料をできるだけ使わず、クリーンなエネルギーを活用していくための変革やその実現に向けた活動）、コンシューマサービスなど多様な分野にわたり、社会課題の解決を中心とした新しいビジネス創出を通して、よりよい社会、よりよい未来をつくる挑戦が日々生まれています。個々の技術やアイデアを他者との出会いや協業によって、より



■ STATION Aiの内装

よいものへとアップデートし新しい価値を生む。私たちはそれを「オープンイノベーション」と呼び、そこがいまの日本に、社会に必要なものと感じています。また、オープンイノベーションを実践するにあたり、重要なのが「偶発的な出会い」と考えています。STATION Aiでは出会いを生むためのイベントが日々開催されています。コーヒーや軽食を片手に交流ができるラフなイベント、100名を超えるオーディエンスに対してスタートアップ企業が事業について熱く語るピッチイベント、企業や大学がもつリソースをスタートアップ企業に提供するセミナーイベントなどが行われ、企業・スタートアップ・行政・教育機関といった立場を超えた出会いが生まれています。出会うことで新しい価値が

生まれるオープンイノベーションをSTATION Aiメンバーが主体的に取り組んでいます。例えば、地域に根ざしたスーパーマーケット企業がSTATION Aiで出会った短距離移動支援モビリティを扱うスタートアップと連携し、足腰の自由なことが、店舗の中で移動することをサポートする取り組みを行っています。

## 「やってみたい」が社会を動かす、学生起業家育成プログラムSTAPS

また、STATION Ai内では次世代の起業家となる学生の支援として愛知県庁が学生起業家育成プログラム「STAPS (STATION Ai Program for Students)」を提供しています。

STAPSは、高校生から大学院生までを対象とし、15か月間本気で事業アイデアを磨き上げ、実践的なピッチまで挑戦するプログラムで、愛知県庁が主催し、STATION Aiが運営を担っています。先輩起業家やVC、支援者からのフィードバックを受けながら何度も仮説検証を重ね、「やってみたい」を本気で形にしている場でもあります。参加学生からは「起業家の意思決定に間近でふれた」

「進路を考えるうえで、起業も現実的な選択肢だと感じた」といった、自律的なキャリア観の芽生えを感じさせる意見が多数寄せられています。また、過去6回の開催には472名の学生が参加し、うち23名が実際に起業しています。

学びと実社会の接点を構築し、学生一人一人の「問い」や「興味」を行動に変えるための橋渡しとして機能しています。

これを機に「起業」とSTATION Aiに興味をもっていたいただけると幸いです。どなたでもご利用いただけるように、さまざまな層に対応するプログラムを設けています。ぜひ一度お越しいただきこの空気にふれてみてください。



■ 北側外観

神奈川県

## 「働き方改革」は「働きがい回復」から

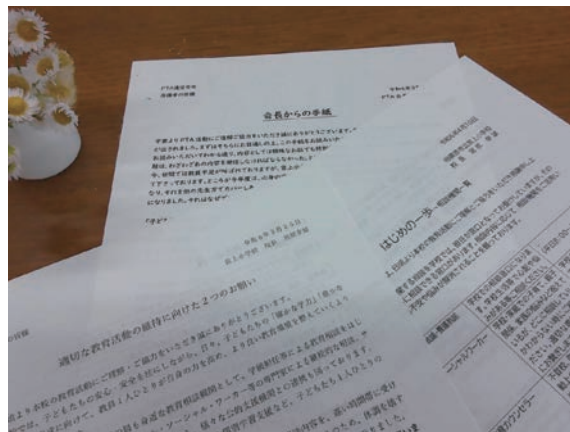
相模原市立宮上小学校 校長 宮原 幸雄

かつて放課後の職員室では、教材研究や授業のありようについて語り合う姿が多く見られました。各々が授業力を高めるために時間を費やし、子どもの変容を見取ることで教員としての成長がわかる「働きがい」を感じていたのかもしれません。なにより、仕事が楽しかったのです。

近年、教員採用試験の倍率が2倍を割る自治体も散見されますが、はたして教員という仕事の魅力はなくなってしまったのでしょうか。一昨年退職した若手教員がこんなことをこぼしていました。「仕事を楽しいと感じられません。理不尽な要求に疲れました」と。彼が疲弊してしまった大きな要因に「時間外」に「学校外」のできごとまで対応を迫られた現実がありました。彼は保護者対応に追われ、仕事を楽しいと感じる前に辞めてしまいました。これでは若手がどんどん辞めてしまう。そう思い、私は保護者向けに「適切な教育活動の維持に向けた2つのお願い」と題した文書を出すことにしました。そこでは、過去の事例を掲載して「相談内容」と「対応時間」の限定を明言しました。学校外におけるトラブルについては、基本的に保護者の責任の下で対応すること。そして、緊急事案を除いて、保護者面談等は勤務時間内に行う旨を記載しました。文書発出時には相当な反発があると予想していましたが、意外にもゼロでした。

以来、本校職員の勤務時間外の対応は減少し、教材研究等にあてる時間が増え、退勤時刻も早くなりました。また、職員からは「学校としてこのように対応します」と保護者に言いられることがなにより安心という声が聞かれました。

近年、働き方改革として事務負担等を軽減する取組が行われていますが、教員が安心して教育に真正面から向き合えるような環境づくりが先決なのではないでしょうか。



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

北海道

## 苫小牧市におけるゼロカーボンの取組

苫小牧市 産業経済部・環境衛生部

苫小牧市は製造や物流、エネルギー関連など多様な産業が集積する、北海道を代表する産業拠点都市です。特に海上物流については、北日本最大の国際拠点港湾である「苫小牧港」を擁し、国内向け取り扱い貨物量は全国1位を誇り、北海道の港湾貨物の約半数が苫小牧港で取り扱われております。

苫小牧市におけるCO<sub>2</sub>の排出量は産業部門が約7割を占め、2050年のゼロカーボンシティへの実現に向け、地元企業によるさまざまな取組が進められています。工場等の排出ガスからCO<sub>2</sub>を分離回収し、地層深くに貯留するCCSという技術については、苫小牧市において日本初の大規模実証試験が行われ、2016年から2019年までに約30万トンのCO<sub>2</sub>圧入を達成しました。現在、苫小牧沖でのCCSの実用化に向けた「先進的CCS事業」により技術検討が行われており、2025年2月には国内初となる「CCS特定区域」にも指定され、事業化に向けた取組が進んでいくと見込まれています。

産業部門だけに限らず、業務部門や家庭部門といった民生部門における排出量削減の取組も非常に重要であることから、令和5年度から2か年で「ゼロカーボン×ゼロごみ大作戦！」と題し、さまざまなイベントを通して、市民のゼロカーボンへの気運醸成を図ってきました。とりわけ家庭部門における取組については、まずは次世代を担う子どもたちへの啓発が重要との観点から、令和6年度に市内全小・中学校37校で出前講座を実施しました。また、出前講座と併せて、家庭で簡単にできる取組を夏休み・冬休みにチャレンジする「CO<sub>2</sub> CO<sub>2</sub> おうちで！ゼロカーボン！」や、各校が重点的な取組を宣言する「ゼロカーボンスクールチャレンジ宣言！」といった事業も展開したことにより、子どもたちの意識にも着実に根づいてきたと実感しています。



「ゼロカーボンスクールチャレンジ宣言！」の動画はこちらから視聴いただけます。



市内小学校での出前講座の様子



福岡

## 仲間・家族・地域とつながる 読書活動の推進

大牟田市立倉永小学校 校長 藤吉 和美

本校は大牟田市の最北端に位置し、自然環境やたくさんの歴史・史跡に恵まれた学校です。長年にわたり学校経営の中核に図書館教育を据え、学校・保護者・地域と連携しながら読書活動を推進し、豊かな心と確かな学力の育成を旨とともに、学校・家庭・地域のつながりを深めています。これらの取組をもとに学校図書館教育研究大会の開催や、各種図書館コンクールにて、たくさんの受賞を積み重ねてきました。令和6年度には全九州学校図書館コンクールにおいて、最優秀賞ならびに文部科学大臣賞を受賞しました。

本校では朝読、読書ボランティアや保護者による読み聞かせ、読書に関する行事や集会、家族読書等、さまざまな読書活動に取り組んでいます。中でも本校独自の取組として次の2点が挙げられます。

①図書委員会の子供たちが日本十進分類法に照らし、学校図書館のマスコットキャラクター「クラホン（倉本）ファミリー」を考案し、「学校丸ごと図書館」を推進しています。このことで子供たちは、日本十進分類法を身近に捉え、日常の学習や読書生活の中で、幅広く学校図書館を活用しています。また、図書館はもとより、校内の関連する場所に「クラホンファミリー」を掲示したり、学校行事や委員会活動に活用したりして、全校児童を読書に誘っています。

②校区内の保育園や幼稚園・中学校・高等学校・コミュニティセンター・老人介護施設と連携した読み聞かせを行い、思いやりの心を育み、社会福祉の輪を広げています。

今後も読書活動を中核に、学校・家庭・地域との連携を強め、未来社会を心豊かにたくましく生きる子どもの育成に努めてまいります。

### 子供たちが考案した クラホンファミリー



石川

## 「創造力」を育む 新金沢型学校教育モデル

金沢市教育委員会 野口 弘

金沢市教育委員会では、令和7年度より「新金沢型学校教育モデル」の実践をスタートしました。

これは、新しい時代が求める自学・共創の学びを通して、主体的にデジタル社会と関わる「デジタル力」、学び続けるための土台となる「読解力」、他者を尊重し自分の意思を伝える「コミュニケーション力」の三つの力を基盤に、児童生徒が「自分はどうか」「自分はどうか」「自分に何ができるか」を考え、「自分」と「みんな」で新しい価値や最適解を見出す「創造力」を育むことを目指したものです。

「新金沢型学校教育モデル」を構成するのは、金沢独自の小中一貫教育のもと、児童生徒が「何を学ぶか」として新しい時代に対応する力を育む「金沢ベーシックカリキュラム」、「どのように学ぶか」として、自ら問い、自ら行う「金沢探究スタイル」、「何ができるようになったか」として児童生徒が学びの成長を自覚する「金沢リフレクション（振り返り）」の三つです。

また、デジタル力育成のために「デジタル科」を新設しました。「デジタル科」の授業は文部科学省の授業時数特例校制度等を活用し、各教科の年間標準時数を1～3時間ずつ減じて、生活科や総合的な学習の時間に上乗せして実施しています。プログラミング学習の充実、データ活用探究学習、デジタル・シティズンシップ教育の充実、先端技術体験の四つで構成され、小学校1年生～中学校3年生の9年間を通じた金沢独自のカリキュラムとして実施しています。



詳しくは金沢市のウェブサイトをご覧ください。



# 子どもの心理とコロナ禍 ～“何ものか”と“道徳的傷つき”～

東京学芸大学教授 松尾 直博



前号では、児童生徒の発達や精神的健康の状況悪化が、物理空間やサイバー空間で生じている「何ものか」に児童生徒が浸ることによって生まれてくる可能性があることを述べた。最終回でもある今回は、この「何ものか」の一つとして考えられる「道徳的傷つき」について考えてみたい。

## 「道徳的傷つき」とは？

人のウェルビーイングを低下させ、ときには危機的な状況に陥らせるものとして、「モラルインジャリー」という考え方が注目されつつある。日本語では「道徳的負傷」または「道徳的損傷」と訳されることが多いが、本稿では「道徳的傷つき」と表現する。道徳的傷つきは、道徳的信条や期待に反する行為をしたり、それを防ぐことができなかったり、そうしたことを目撃したり、知ったりすることによる傷つきである。

道徳的傷つきは、2000年代の中東での戦争等に関連して言及されるようになり、2020年代に入って新型コロナウイルスの世界的な感染拡大、いくつかの戦争において再注目されるようになってきている。戦争の中で非人道的な行為を自らが行ってしまった、あるいは他者のそれを目撃してしまった。医療状況の逼迫により十分な対応ができずに、コロナウイルスに感染した人が亡くなってしまった。こうした事実をニュースなどで知った人の中でも、道徳的に傷つき、罪悪感や怒り、失望、虚しさなどに襲われた人がいるとされている。

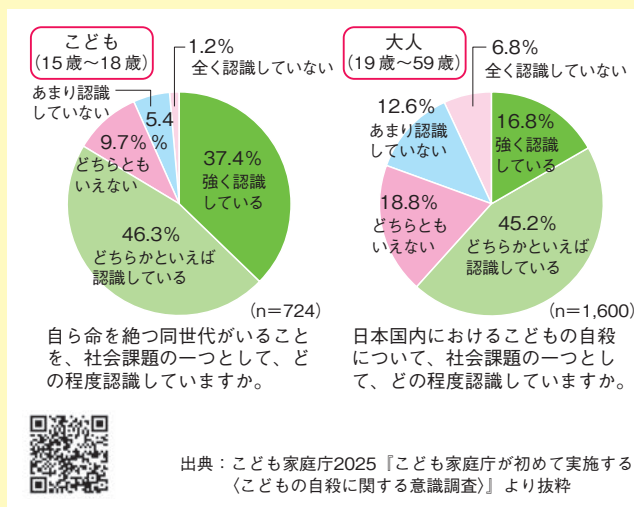
（参考文献）

E.スヴォボダ『特集…トラウマと向き合う コロナ禍で増えた心の病 モラルインジャリー』日経サイエンス2023年4月号

## 子どもが経験する道徳的傷つき

特にサイバー空間の中で、道徳に反する誰かの行為を目撃する、あるいは知ることは非常に増えているのではないだろうか。前号で述べたように、子どもたちのインターネットの利用で「検索をする」「ニュースを見る」「動画を見る」が増えている。著名人や公人も含めた大人の起こした犯罪、不祥事、人権侵害、誹謗中傷を目にしたり、知ったりすることは以前より増えているだろう。実際そのような話題について話している子どもも多く、意識はしていないが道徳的に傷ついている可能性がある。

また、子ども家庭庁が行った「子どもの自殺に関する意識調査」によると、子どもの自殺を社会



課題の一つとして認識している割合は、大人（19歳～59歳）よりも、子ども（15歳～18歳）のほうがかなり高いことがわかっていく。子どもが自ら命を絶たなければならぬ社会的状況について、大人より子どものほうが道徳的に傷ついて、心を痛めているのかもしれない。

## 「何ものか」と向き合う

前号で提示した「何ものか」の一つとして、「道徳的傷つき」があるのではないかと、というのが現時点での私の見解である。意識はしていないかもしれないが、社会全体が道徳的に傷ついており、特に子どもが強く傷ついているのではないかと。少しでも世界から道徳に反する行為を減らさなくてはならないし、そうした行為をどう捉えればよいのか、大人が子どもに語りかける必要があるだろう。道徳的傷つきは「何ものか」の一つ、あるいはその一部ではない。我々は、わかりやすい何かに原因を求めるのではなく、「何ものか」という捉えどころがない苦難のものについて常に考え、子どもと一緒にそれに飲み込まれない方法を探っていく必要があるように思われる。

松尾直博 (Naohiro Matsuoka)

1970年福岡県生まれ。筑波大学第二学群人間学類卒業、筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。自治体の発達相談心理判定員や母子保健センターの心理判定員、スクールカウンセラーなどを務める。公認心理師、臨床心理士、学校心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。著書に『新時代のスクールカウンセラー入門』（時事通信社）、『絵でよくわかるこころのなせ』（学研プラス）など。



【連載第1回】（全3回）

## 『現代アートのすゝめ』



森美術館 館長  
片岡 真実

撮影：新津保建秀

「現代アート」についてはさまざまな定義が可能だが、美術の歴史的な観点から言えば、フランスを中心に発展した近代美術が、第二次世界大戦を契機とするアメリカ合衆国へのアーティストの移住や亡命などを経て、戦後はアメリカ、とりわけニューヨークにその中心が移る。したがって、第二次世界大戦が終わった1945年以降の美術を「現代アート」と呼ぶことが最も一般的だろう。ただ、現代アートの父と呼ばれるマルセル・デュシャンが既製品を作品化した最初のレディメイドは1913年、現代アートの始まりとされる『泉』の発表が1917年であるから、現代アートの萌芽は20世紀初頭にすでに見られていた。一方、コンセプチュアル・アート、ポップ・アート、ランド・アート、フェミニズム・アート、パフォーマンス・アートなど実際に戦後のアメリカでアートの定義が多方向に発展したのは1960～70年代だ。ドイツの国立現代美術館ハンブルガー・バーンホフでは1960年代以降のアートを収集している。さらに1990年代以降は、冷戦構造が崩壊し、新しい国家が生まれ、世界の政治的・経済的なパワーバランスの更新に伴い、全く新しいアートの様相が世界各地で見られるようになる。旧社会主義国のアート、北欧のアート、ロシ

アのアートなどが注目され、アジア、ラテンアメリカ、アフリカなどの地域でも経済成長とともに新しいアート市場が醸成され、この35年間に新たな世代のアートコミュニティが発展してきた。そのためアートがグローバルに拡がったこの時代以降を「現代アート」と呼ぶ人もいる。もちろん、「現代アート」は英語ではコンテンポラリー（同時代の）アートだから、いつの時代の作品も、生まれた当時は「現代アート」には違いないのだが。

森美術館では、2023年の開館20周年記念展の一つとして「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」を開催した。90年代以降の現代アートに見る文化的グローバル化は、作品の解釈に従来の美学的、美術史的な観点だけではなく、作者や作品の背景にある固有の歴史、政治社会変革、文化的・宗教的慣習などの文脈を読み解くことの必要性を明らかにしてきた。つまり現代アートはもはや学校の授業科目の一つである「図画工作」「美術」の範疇に留まらず、学校で学ぶ世界のあらゆる側面に通底しているのだ。現代アートは従来の“美術”から解放される必要がある。そもそも古代ギリシャの「エンキュリオス・パイディア（円環的教養）」、その後のリベラル・アーツ（自由七科）に遡ってみれば、文法学、修辞学、論理学、数学、幾何学、音楽、天文学といった観点から世界をいかに総合的、領域横断的、体系的に学ぶのかといった問いは、今日のように個々の専門領域が細分化され、情報に溢れた時代には、改めて大きな意味があるだろう。「ワールド・クラスルーム」展では150点の作品を「国語」「社会」「哲学」「算数」「理科」「音楽」「体育」「総合」の8章に分類し、現代アート作品を通して世界を多角的に学ぶ機会を提供した。本展ではスクール・プログラムの申し込みが開館以来最多となった。

「世界を学ぶ教室」としての現代美術館、そして現代アートは、世界を総合的・俯瞰的に学び、批評的な思考力を育成するためにも多くの可能性に溢れていると考えている。



●内観（センターアトリウム）  
撮影：古川裕也 画像提供：森美術館

## 戦禍のウクライナでタクトを振る

ウクライナ・オデーサ劇場から「9月の開幕コンサート」の指揮をしてほしい」とオファーがあったのは、ロシアによるウクライナ侵攻が始まって間もない2022年5月。音楽監督、および首席指揮者が立て続けに辞めてしまい、首席客演指揮者であった私に白羽の矢が立ったのです。ウクライナ全土がレベル4の危険地域に指定されており、基本的には渡航禁止。外務省をはじめ家族や友人、あらゆる方面から猛反対されましたし、私もすぐには返事ができませんでした。2〜3か月悩みましたが「人として、音楽家として正しいと信じることを貫こう」と決意し、翌年9月初旬に隣国モルドバから陸路でオデーサに入りました。

頻繁に起こる停電、爆撃の音、避難警報が鳴るたびにシェルターに駆け込みながらのリハーサル……。オデーサの日常はまさに「死と隣り合わせ」でした。「なぜ逃げないの？」と思われるかもしれませんが、海外、特に欧州では音楽を、人間に不可欠な魂の癒やしと捉えていて、残った楽団員たちは人々が傷つき、恐怖に耐えている、今この場にこそ音楽が必要なんですと信じ、演奏を続けていたのです。

迎えた本番。9月10日の公演は幕が下りた後も拍手が鳴りやまないほどでした。さらに兵士



たちが舞台上がってきて、涙を浮かべながら「美しい音楽をありがとう」と私の手を握ったのです。あの日を生涯忘れないと思います。

## 魂の音楽を日本に

帰国後、彼らの魂の音楽を日本に届けたいと来日公演を企画したのですが、どこの興行会社も「採算が合わない」と取り合ってくれない。ならば、自分たちでやるしかないというクラウドファンディングで資金を募ることに。結果、2000万円以上の寄付が集まり、さらに、企画に賛同する企業、行政からも支援をいただきまして、今年の3月、横浜、神戸、北見での公演が叶いました。全ての回で会場が一体となるようなスタンディングオベーションが起り、言語を超えて人と人をつなぐ音楽の力を改めて実感しましたね。日本に避難しているウクライナのかたがたをご招待していたのですが、聴きながら涙を流されているかたも多く、故郷の音楽がわずかででも彼らの心を癒やしたならば、音楽家として少なくとも一つは役目を果たせたかなと、胸をなでおろしています。

## 指揮者を志したきっかけ

音楽に親しんだのは父の影響が大きいと思います。父は映画音楽の愛好家で、家には大量のLPレコードがあり、私自身も気づけばレコードに針を落として音楽を楽しむ子どもになっていました。ピアノを習い、中・高と吹奏楽部でトランペットを吹いていましたが、思い描く進路に指揮者は含まれていませんでした。

ところが、高校2年生の冬、忘れもしない1986年2月。部活の後輩が小澤征爾さん率いるボストン交響楽団の日本公演チケットをプレゼントしてくれて、聴きに行ったのです。その公演、その指揮に衝撃を受け一瞬で道が決まりました。しかし、どうすれば指揮者になれるかがわからない。インターネットもない時代、本屋に行っても指揮者のなり方を解説する本な

どないし、誰に聞いても手掛かりすら得られず、しばらく途方に暮れていました。そんな時、アルバート先の店長が学生時代に上智大学管弦楽団のコンサートマスターを務めていたことが判明したのです。後日、店長が吹奏楽の神様と呼ばれた指揮者・汐澤安彦さんに引き合わせてくれて、そこから道が拓けていきました。

私はよく子どもたちに、人生に大切なものは「読書と旅、出会い」と語っているのですが、読書も旅も人との出会いも自分という枠から一歩外に出る行為だからです。私自身も人との出会いによって夢を叶えることができたし、その後も人生の岐路に立つたびに、自ら外に出て行動することで、会うべき人に会えて、そして導いてもらったと思っています。

## 音楽とは楽しむもの

日本では大人も子どもも「クラシックは堅苦しく聴くもの」と捉えている節があつて少しもつたないと感じます。イタリアの子どもたちは、オペラで悪党をやっつけるシーンでは「やっつまえ！」と叫び、愛を語るシーンではヒューヒュー指笛を吹いてはやし立てるんですよ。音楽の、楽は、学ではありませんよね。偉大なる先人が、音楽に、楽しむ、という素晴らしい漢字をあててくれたのです。ぜひ肩の力を抜いて楽しんでほしいと思います。

## 吉田裕史 (Chiofumi Yoshida)

1968年生まれ。イタリア・モデナ・バヴァロツティ歌劇場フィルハーモニー音楽監督。ウクライナ国立オデーサ歌劇場首席客演指揮者。2023年戦禍のウクライナで指揮。クラウドファンディングで2000万円以上の寄付を集め、2025年、オデーサ歌劇場オーケストラ日本公演を成功に導く。国内外でオペラの振興や音楽を通じた国際交流に功績を残したとして文部科学大臣表彰を授与される。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆巻頭インタビュー・浅川智恵子さんのインタビューに大変感銘を受けました。子どもたちどんな小さなことでも自ら決めたことをやり遂げる「軸」を持ってほしいというメッセージから、選択肢が多いことが必ずしも良いことではなく、その環境下でどう努力するかが大切だということを変えて教えていただいたと思います。
- ◆「北から南から」の四街道市の取組について。青少年の健全育成活動に高校生も加わっていることは素晴らしい。とくに補導委員達のバトルールと一緒にやっていることなどは、小・中学生や高校生達に身近に感じることでしょう。
- ◆八王子教育委員会の不登校対策の方向性に「学校の内外で専門的な相談・指導を受けていない不登校児童生徒をゼロにすること」とありました。この対策に賛同です。

## 学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版